

## ソネット集を序章とするシェイクスピアの審美への変節 —シェイクスピアとエリザベス朝の愛のコンヴェンション—

池上 賀英子

### Shakespeare's Turning Round from Elizabethan Love Conventions —A study of His Philosophy of Love, His Sonnets as the Prologue—

Kaeko IKEGAMI

#### 1. シェイクスピアの愛の二元論と『薔薇物語』の影響

シェイクスピアの『ソネット集』において展開されている‘love’と‘lust’のambivalenceといえるシェイクスピアの愛についての哲学に影響を与えたのは、「宮廷風恋愛の伝統」であったことについてはすでに考察した。

シェイクスピアへと至る「宮廷風恋愛の伝統」は、「宮廷風恋愛の詩人」としての「チョーサー」が果たした役割であったことも、既述のごとくである。チョーサーは「宮廷風恋愛」の詩をもって中世ヨーロッパの詩の慇懃、優雅さの理想を英詩に導入し、英文学の水準をフランス文学のそれまで押しあげ、英文学において「宮廷風恋愛」から「浪漫的恋愛」へ連続する伝統の源流となった。

チョーサー自身フランス宮廷詩の伝統を習得したのは、生涯を通じての甚大な文学的影響となり自らもその翻訳を手がけた『薔薇物語』と、加えて、同時代の詩人ギョーム・ド・マシヨール (1300-77)、ジャン・フロワサル (1337-1404)、ユスターシュ・デシャン (1346-1406) 等からであったとされている。<sup>(1)</sup>

そしてJohn Vyvyanは、シェイクスピアが『ソネット集』で明確に提示した彼の「愛の二元論」(the idea of the duality of love) は、チョーサー訳になる『薔薇物語』を通してあった<sup>(2)</sup>、とSHAKESPEARE and the Rose of Loveで述べて、シェイクスピアと「薔薇物語」に拠り中世後半を渡る「宮廷風恋愛」の伝統とを連結する道筋を指している。しかも、Vyvyanは、チョーサー訳『薔薇物語』(The Romaunt of the Rose) は既にシェイクスピアの初期のlove-playsの

中で既に普及していた、という。その根拠として、中世フランス語のRoman de la Roseからのチョーサーの英訳版は、1532年にはWilliam Thynneによって出版されていた事実をあげ、シェイクスピアはその版を用いたことの推論としている。<sup>(3)</sup>

チョーサーの英訳版『薔薇物語』は、原詩に無い部分を加筆したり、原詩を修正したり、省略したりする箇所がかなり多いし、原詩は約21,780行だが、英訳は原詩の三分の一に止まり、7,698行となっている。その内ロリスの部分は4,070行で、残りはマンの部分であった<sup>(4)</sup>とはいえ原詩に対するチョーサー訳『薔薇物語』の実質における関係と、その後の英文学史上における意義について、チョーサー訳の邦訳者である境田進氏は以下のように評価し示唆している。

チョーサーの関係した英訳部分は原作に比べれば確かに三分の一と短い、この部分だけでも原詩の真髓部分であり、これだけでもチョーサーを中心とする翻訳は不易の価値を中世英文学に添えたと思いたい。確かにジャン・ド・マンの著作より百年後にチョーサーは翻訳し、更にチョーサーはオヴィディウス、ギョーム・ド・マンシヨール、フロワサルらの影響もあったと思われるものの、やはり「薔薇物語」によりチョーサーを通じて、英詩もフランス詩並みの水準に達し、より洗練された風刺も英文学に大いに影響したと思われる。<sup>(5)</sup>

重ねて、「薔薇物語」の重要性について、例えば「たとえチョーサーが『薔薇物語』を翻訳しなかったとしても、チョーサーを含め当時の詩人からスペンサ

一まで英詩を理解するには『薔薇物語』は必読の書である。<sup>(6)</sup>とまでいっているW. P. ケアの(*Medieval English Literature*) この確言をもって強力な裏打ちとしている。

チョーサーの『薔薇物語』訳によって手近かになり近親性を増して知りえることになった『薔薇物語』に集約された「宮廷風恋愛」の、原形における意味とシェイクスピアへ手渡されて来た伝播の経路の概要と処々での要点は、ここにおいても再識する用がある。十二世紀初頭に南仏プロバンスの宮廷に始まる、ギリシア・ローマの愛とは基線を描く、女性への献身としての愛の文芸的誕生があった。トゥルバドゥールの「至純の愛」(fin'amors)の概念であった。それが最初に纏った独特な形は——「謙譲」「礼節」「姦通」「愛の宗教」という四つの特色を持つものであった。以後、その地から南下してイタリアに向かい、グイド・カバールカンティを始めとする清新体の詩人たちを通してダンテ、ペトラルカやボッカチオ等へ至る。他方、自らもトゥルバドゥールであったアキテーヌ公ギョーム九世の孫娘エレーノールの、彼女の人生の航路に随行して北へ向かう。まずフランス王ルイ七世妃となったことに伴って、南仏気質の恋愛観は北仏の叙情詩人に受け継がれ倫理的に規範化された。その後英国王ヘンリー二世との再婚によって渡英したエレーノールがヘンリーへの私憤から帰国し、彼女自身の宮廷サロンと彼女の二人の娘達の、とりわけ、シャンパーニュ伯爵夫人であったマリーの宮廷は北フランスの文学サロンの中心的存在であった。「愛の神」を正義とする「恋愛評定」が頻繁に行われ、シャンパーニュ伯爵夫人に関係する宮廷付司祭アンドレーアス・カペルラヌスが「宮廷風恋愛の教範の書」を著し、お抱え詩人であったクレチアン・ド・トロアはその愛の教義を「ロマンス」に展開して標した。クレチアン・ド・トロアは、彼自身オヴィディウスの*Ars Amatoria*を翻訳しているように、南仏の恋愛観が北上して既にそこにあったオヴィディウスの伝統と混じり合い、北仏トルヴェールの文学が創り上げられることとなる。そして、この文学の伝統の中で十三世紀フランスにおいて寓意と教訓文学の傑作である、『薔薇物語』は生まれたのである。<sup>(7)</sup>

ところで殊、ギョーム・ド・ロリスとジャン・ド・マンによる『薔薇物語』について——それは、以後

二世紀の間ヨーロッパの中世末の貴族的恋愛の観念を決定づけたとホイジンガの言う「宮廷風恋愛」の、女性崇拜、女性への奉仕、恋わずらい、恋愛の高い倫理性等の問題を寓意作品にして提唱している前提は不動ではあるが——理想主義的「雅の愛」の「擁護者」であるロリスの寓意形式による洗練された表現で語られる雅びと礼節の愛の術と定義と、その後陣としてマンによって顕示される愛の現実的性愛の側面の提唱に続けられていくことによって、ヨーロッパ文化史の愛の大道を標したと称される『薔薇物語』の提出する愛の理想は結果として幅狭したものとなっている。即ち、『薔薇物語』前後篇は、以後「浪漫的」と「現実的」と対立する二つの恋愛観ないし女性観の伝統を作った、という重要点を強く留意しておかなければならない。

つまり、中世における世俗的愛の二大伝統は、宮廷的愛と現実的性愛とであり、前者は浪漫的、理想主義的、貴族的、後者は現実的、自然主義的、庶民的、喜劇的である。前者は十二世紀に、後者は十三世紀に起源し、前者はロマンスと『薔薇物語』前篇のものであり、後者はファブリオーと『薔薇物語』後篇のものである。そして伝統的には、中世後期において前者は恋愛の主流、後者は傍流をなし、それぞれルネサンスにおける恋愛の主潮と傍系となっているという点である。<sup>(8)</sup>

そして『薔薇物語』とその愛の伝統を英国へ直結させたチョーサー自身においても、『カンタベリー物語』の制作前と制作とその以降において、同様に、二様の愛の伝統を踏襲しつつ独自性を刷り込んでいく。<sup>(9)</sup>

以上のように、チョーサーを通し『薔薇物語』の影響下において、チョーサー自身より「宮廷風恋愛」が手渡された時、その反社会的姦通恋愛の側面は結婚愛へと倫理的に整合化されて止揚され、結婚即恋愛、夫婦即愛人という愛の型が確立され、「宮廷風恋愛」のロマンチズムとリアリズムが融合され劇的効果が挙げられていた。「宮廷風恋愛」の伝統とチョーサーを介して変奏のすべてを相続して、中世から近代へ、シェイクスピアは愛を描き始めたといえる。

スペンサーに代表されるネオ・プラトニズムに拠り愛の理念を昇華させていくひたすらな「精神的な浪漫的恋愛」でもなく、シドニーに代表される感覚的な浪漫的恋愛でもない、実際、晦渋極まりない「シ

シェイクスピアの愛のロマンチズム」と言うべき様相で、愛の実体を根底から問いなおし思考を巡らせていった。『ソネット集』においては彼の思考の方法と材料がそれらの質と量の大半において象徴的に露呈され、『ソネット集』を間に差し入れて、シェイクスピアの愛のテーマは以前を集約し纏め直し以後への予測を提示していくといえる。

つまり、シェイクスピアは、スペンサー的愛を知悉し通過したところから自己の愛のテーマを開始していることは、『アモレット』等スペンサーの詩作品と照合することで、容易に解る。一方、シドニーの愛との境目に関しては、シドニーでは既に‘dark’というシェイクスピアに繋がりをもつ重要な概念が愛の対象となる女性の属性の描写に取り入れられているところからも、少々考察する必要がある。

『アストロフェルとステラ』のソネット・シークエンスの結末において、シドニーの *Astrophel* は中世の courtly romance の主人公のように姦通の世界にのめり込めず *Stella* との別離に身を置いているところは、愛に対するシドニーの理性と知性の裏付けに他ならず、同時にその限界も表裏一体として附随的に見えて来ることになる。一方シェイクスピアの『ソネット集』の「詩人」は、‘Fair Youth’と‘Dark Lady’への‘rational love’と‘physical love’の混沌の中で、自己の情念を抑制しているかに見えて、抑制しきれないでいるし、そのことの表現においては、いかにも自己の情念を整理し、割り切り、また諦めているかに見えるが、決して悟ってもいないし、諦めてもない本性が読みとれてくる。Sidneyの *Astrophel and Stella* と対峙させることで、その違いを的確に述べている次の見解に、傾聴してみる。

よく人は、*The Sonnets* 中の詩人は、detachmentの境地であると言うが、これほど見当違いな批評はあるまい。彼は現実を直視しながら、それを忽ち糊塗し、斯瞞の中で身を慰める。底なしの情念が彼の理性を混乱させ、その図の中に巻き込んでしまう。そこにSidneyにはない複雑さ、あいまいさが生じてくる原因がある。奇知をその真髄とする sonnet は、Sidney においてその極点に達したと評しても過言ではないが、Shakespeare は、それを越えることによって、独自の世界を開いていたと言えよう<sup>(40)</sup>

つまり、恋愛を至上とする故に姦通愛を掟とし厳格な女性崇拝を以て為す『薔薇物語』経由の中世渡来の「宮廷風恋愛」の様式と、チョーサーとスペンサーとシドニーの倫理と理想と知性で受け継がれてきた英国風恋愛のマナーを御破算にし、伝来の経路を遡航して再び愛の本性を原姿から見つめ直し後方の近代に向けての再構築を希いつつ、シェイクスピアは、愛の議論を『ソネット集』より始める。

以上のようにチョーサー訳の『薔薇物語』を経験として「宮廷風恋愛」の様式と表現の伝統を受け継ぎそのコンヴェンションを踏襲しながら、加えてチョーサーによって既に成された結婚愛への移行による「宮廷風恋愛」の英国化と倫理的整合性も周知の上で、それにもかかわらずシェイクスピアは、『ソネット集』において彼の愛の哲学の序章として、‘love’と‘lust’という愛の二様相を「Fair Youthへ捧げられる愛と賛美」と「Dark Ladyへ向けられる情欲と諦観」という、エリザベス朝の宮廷社会の現実を背景にした、「宮廷風恋愛」詩へのパロディ（揶揄）とも見える構図をとって、自己の愛のヴィジョンを起承転結させて行く。とりわけ男女の恋愛における厳格な女性崇拝を主たるコンヴェンションとするそもそも「愛の宗教」に対しては、詩人を間にしての‘Fair Youth’と‘Dark Lady’の背信と姦通によって‘love’と‘lust’の境目を曖昧にし、「愛」そのものの存在を済し崩し、それへの信頼を危うくさせていく。

幾重にも意図されているシェイクスピアの冒瀆的変節から展開されるシェイクスピアの愛のヴィジョンを、「宮廷風恋愛」のシェイクスピアに到るもう一条の南下経路においてもそこにおける影響関係を遡航して行くことによって、「ネガティヴ・ケイパビリティ」を天性とするシェイクスピアの、それでも辛うじてそれ故に必然と言い得る、愛の独自性を各論することができることを期待して、この論を次章へと続けていきたい。

チョーサーまでようやく辿り着いた時点における、中世の宮廷的恋愛の持っている近代と現代に対する意味について、吉田新吾氏は結語としてこう述解している。

ロマンスが近代小説の起源となり、騎士道がルネサンスの紳士道となるように、宮廷的恋愛はルネサンスにおける浪漫的恋愛の源流となる。そし

て宮廷的恋愛といい、現実的性愛という世俗的愛の謳歌は、中世において宗教が社会、文化の指導原理であったことに対する世俗精神の抵抗、人間性の主張として、近代のヒューマニズムにつながるのである。そして宮廷風恋愛は、そのコンヴェンションの不自然な部分、即ち、恋愛と結婚の結合によって反社会性を棄てつつ、その浪漫精神を永遠に伝えるのである<sup>(11)</sup>

そして、後続して生じて来るはずの更なる問題意識に向けて、延長線上でその先へ狙いを定め、ここに至った恋愛観の意義を修辞疑問形にして念を押す——「知性とソフィスティケーションの現代においては、愛のロマンチズムはもはや時代遅れであるといいきれるであろうか」<sup>(12)</sup>と。

## 2. エリザベス朝の愛のコンヴェンションとイタリアの諸影響

*Elizabethan Love Conventions*を著したL.E. Pearsonは、まず、シェイクスピアに至るエリザベス朝の愛のコンヴェンションへのイタリアの影響を論じる前段の重大な認識として、チョーサーとその後の初期英国詩から相続したものの意味の大きいことを強調しその英国的継承と変容を概容してから議論を始めていく。以下少し、L.E. Pearsonのとらえたエリザベス朝とシェイクスピアへのチョーサーの意味を、イタリアからの影響を確認する前に、認識してみたい。

チョーサーは、宮廷風恋愛をアレゴリーという方法で一般の人々の考えと状況に同調させて、聖母マリアへの賛歌で貞節を賛美し、恋する者の悲痛な嘆きを宗教的哀歌に変奏して歌おうとしていたフランス詩人たちの歌い方を、英国で反映させたとする。そしてPearsonは、チョーサーの宮廷風恋愛詩にみられる愛の伝統と変容の概要を、シェイクスピアにおける愛の哲学の結論であるとPearson自身が論じる*Romeo and Juliet*と*The Merchant of Venice*に描き出されている宮廷風恋愛からシェイクスピアのロマンチック・ラブを説明するため、対照させて説得していく。チョーサーはダンテの影響を受けて‘courtly love’に潜む倫理観が否定するであろう‘the evil’を一層明確に見極める。そこからCriseydeを‘courtly love’

の網に捕らえられた‘愛のspirit’を冒瀆する罪深い女性として、すばらしくかつ同情的に描くことを着想したとする。一方、シェイクスピアはJulietを愛のためにのみ生きRomeoとの神聖な愛の完結のために生命を犠牲にする覚悟を持つ女性として描こうとしている。またチョーサーが‘courtly love’を扱う作品の全てにおいて、恋する者における‘humility’と女性の側の‘superiority’が重視され、恋愛には秘密性が強く要求され、愛は容易に獲得出来ないものであるのに対し、シェイクスピアにおいては、恋する男の側の‘humility’も自然で人間らしく、愛する側の女性の理想化も人間的次元で成され得るものとして、故に愛の高潔さも男女の両者において等しく重要であることを示そうとする。そして、愛の喚起へと向かわせるものも、チョーサーにおいてはCriseydeの‘beauty’でありそれが‘sensual love’を呼び覚ます、他方シェイクスピアの女達は恋する男達の恋の思いが‘honest’であれば恋する者に情けを掛けていく。シェイクスピアは、恋の純粋性の維持のために絶対条件とされていた宮廷風恋愛の伝統からの恋の‘secrecy’の緊張感と苦しさを、‘love’を‘marriage’へと進ませることで取り除き、愛とは等しい感動を共有する二つの魂を結びつけようとする情熱としてJulietにもPortiaにも美しく受諾させていく——Pearsonはシェイクスピアの愛のロマンチズムをこう結論づけつつ、シェイクスピアの愛にかけるとこのような両性の平等観の高揚は、愛の権利へのルネサンスの信念に従ってシェイクスピアも描いているのだと附言する<sup>(13)</sup>

そして以上のような、このような時差を見せる愛の概念に向かっていく恋愛を歌うチョーサーとシェイクスピアの、二人の詩人の間に挟在したものとしてPearsonが選定したものが、一つには「英国の愛のソネット」(‘the love sonnet of English literature’)であり、もう一つとして「イタリアから流入して来た愛の思想」(‘the flood of thought from Italy about love and its relation to the life of man’)の存在であったことを確認させる。<sup>(14)</sup> Pearsonは、その影響関係を系譜化しつつ傍らから、とはいえ、シェイクスピアは彼以前に他者が理論化していたことを彼自身の見事な作品に仕上げていっただけであることを、繰り返し念を押す。

具体的な影響力としては、まず中世の騎士道とその精神の再燃があり、それらが宮廷人達に愛のもつ

偉大な教育的力に注目させて、時代の流行の通念になっていたこと。時を同じく、ワイアットが文芸の最前線のイタリアからペトラルカの『カンツォニエーレ』(*Canzoniere*)というソネット詩歌を持ち帰ったことによるソネットの流行である。ソネットという新しい詩形式は、礼儀、貞節、武勇など自己の中世来の理想で織りあげた伝統的'honor'へのヴィジョンから女性のロマンチックな理想像を歌いあげるものであった。このようなペトラルカの愛のソネットの前進を、古典学の復興と教会の中世の女性観の再燃が阻むことになったが、Bemboが継子になってもたらした'Platonic love'についての多くの論文とそれに拠る「美しい女性を想うことによって男性は神に近づく」という、つまり、神の愛は明確な形を持った愛で把握し実現可能にすることが出来る、という考え方が導入されたことで普及が押し進められることになった。そしてPearsonは、この「神聖な愛を手にとることが可能である」という思想に強く動かされて、加えて、イタリアからの女性を男性と全く対等の立場に置く習慣もシェイクスピアに好都合な影響となり、これが男女を完全な個人として要求させることを可能にし、シェイクスピアは、世俗の愛を純化することを思案し今に十分に享受され得る愛を作品化することになる、<sup>(15)</sup>と述べて、シェイクスピアへと続けていく。

しかし、ペトラルカの世俗の愛の称揚への理論建てであったベンボの'Platonic love'の神に向かう美と愛の上昇の概念が、続いてエリザベス朝人にもシェイクスピアにも、「愛の二元論」を宣言しそれぞれの具体像を定着させることへと進んで行くこととなった——すなわち、愛が、'desire'から生み出され満たされるや忽ち終わり大抵は嫌悪感へ変わっていく'sensual love'と、'reason'から生み出されず愛される人に体現され続いて愛される人を真の愛へと変えて行くことになる'true love'と、二元化へ識別されたことである。続いて'true love'が更に'love'と'friendship'へと二細分化は進み個々は称揚されつつ、世俗の愛の至純化の極点において love の nature が見極められた時 'love of man' が 'love of woman' に優るとなる、「愛の序列」が決定された。

その結果、まるで女性へ語りかけられているように男性に向けて愛を込めてソネットが捧げられる現象が生じた。シェイクスピアもまた『ソネット集』

においてthe sonnetsを the Beauteous Youth に捧げるし、しかも『ソネット集』においては*Two Gentlemen of Verona*と同様に、'love'と'friendship'の愛の序列のテエマを重奏させ、その結果もコンヴェンション通りに自分の愛する女性('the beloved')を友('a friend')へと棄てさせる。Pearsonは此处でもまた、シェイクスピアはエリザベス朝のこのコンヴェンションに従ってソネットを書いているだけであるということ再度強調しながら、その時ですら、愛そのものへの崇拜と普遍的眞実としての愛のヴィジョンに支配されていたので、本質において彼のソネットの愛は男性にも女性にも充当するはずのものとなる、とシェイクスピアの眞摯な同時代性とそれを凌駕するシェイクスピアの普遍性を更に先へと教導していく<sup>(16)</sup>

他に明白なイタリア経由の、エリザベス朝人とシェイクスピアによって吸収された影響があった。その伝来とブームはシェイクスピアのソネット連作帯が完結する前であったという。すなわち、次第次第にエスカレートしていく'the Petrarchistic abuse of the love sonnet'に対して生じた'anti-Petrarchism'の噴出である。

愛は依然としてすばらしい教育的影響力をもつものとみなされ続けていたが、女性へ捧げ続けられる愚かしいほどの崇拜とその「女性への愛」に優る「男同士の友情」への過剰な賛美に対して、いわゆる'the vituperative sonnet'又は'the anti-Petrarchan Verse'が出現したのであった。イタリアにおいて続いてフランスにおいて、ソネットで女性を愚弄の対象としたり軽蔑したりすることが大流行になって来た。Pearsonは、この流行が多かれ少なかれシェイクスピアの『ソネット集』の中で'the Dark Lady sonnets'として反映されているとして、此所にいわゆるシェイクスピアの「黒い女」の出自をみる。だからこそPearson自身は、『ソネット集』の「ダーク・レイディ・シークエンス」にシェイクスピアの自伝的関連性を詮索することは愚言に人心を巻き込む結果になる、と提言し、この「ダーク」コンヴェンションの影響性においてもシェイクスピアの同時代性と普遍性をPearsonは強調する。シェイクスピアもほとんどのエリザベス朝人もこの流行の著しい影響下でソネットを詩作したことは間違いの無いところだが、Sidney Leeが詩人達をリスト化までして断言しているほど、

この流行の文学的習作の目的のためだけなどで決して彼らのほとんどはソネット作詩を試みたのではない、とも言葉を加える。そしてこの‘anti-Petrarchism’の破壊的影響は更に、‘chastity’の理想化とそれへの信仰を転落させ‘inconstancy’を推奨することへと進み、Richard LincheからDonneの初期の作品へ続くことになるもう一条の「ソネット・オブ・ラヴ」というべき道筋が示されることになる<sup>(97)</sup>

そのコースを辿る詩人達と彼等の暫時に異なっていく表現について、Pearsonは個々を概括的に説明していくことで、彼の最終目的であるシェイクスピアの同時代性から普遍的独自性を見極めようとする方向へと、一途に向かって行く。つまり、まずSpenserとthe Earl of Stirlingが‘physical love’のソネットにおける正当的権利とその審美を証明してみせる、続くDrummond of Hawthorndenが‘beautiful spiritual love’に必要とされる‘moral restraint’を介在させる。William PercyとRobert Toftは露骨なりアリズムのコンシートをを用いることでペトラルカ的フレーズの更なる過熱化に対する抵抗を示そうとしていることが窺われるし、‘Zepheria’の詩人はそのような抵抗を自らシークエンスにおいては失敗になる程度までにして見せようとしたと、Pearsonは注解している。そしてDraytonにいたっては、彼には色々な歌い方があるが後期の詩作では男性の最善の本性であるものを男性自らが無視していくことに対する彼の嫌悪感を反映させているのが見える、と述べる。シェイクスピアにおいては、このペトラルキズムからアンチ・ペトラルキズムへの同時代のソネティーア達が継続的に辿って行ったソネットの愛の審美を求めての試作の行程を、シェイクスピアは自己の全作品を通じて思案し続けることで、ペトラキズムへの抵抗から始まったアンチ・ペトラルキストの変節の全行程を一人で完走し、その終わりに、人としての‘the natural love’をペトラルカ風ロマンチックな女性崇拜へと結合させていくことで、彼の愛の哲学を築いた<sup>(98)</sup>、とPearsonは結論する。

シェイクスピアの非個性とも見える程に時代のコンヴェンションを見事に踏襲する徹底した同時代性に準じることの意味と、その心底で辛うじてそれ故にシェイクスピアに必然となるシェイクスピアの独自性を見極めることを、彼の著者の目的としているL.E.Pearsonの研究の最終結論はこの後に言及するこ

ととして、その前に、元祖イタリア発でペトラルキズムに対するアンチ・ペトラルキズムの変遷とその経緯を一暫する用がある。イタリアでのこの発生と発展を辿ることによって、シェイクスピアが自らの作品に提示して問い続けて行く創作活動におけるシェイクスピアの愛と美の思考の過程を、前奏として概貌することに繋がっていると思う。

イタリアにおける「ラブ・オブ・ウーマン」への「反動」は遙かBoccaccioに遡る、とはMax Wolffの説である。もとよりこの種の攻撃の全ての根源は、教会の長途に渡る女性観である「女を罪深く男を誘惑する存在である」として断罪し続けて来た、という背景があった。Bemboが、‘all physical love was bad’と宣言して、この路線上で‘anti-Petrarchism’を発展させることになった、とMax Wolffは指摘する。その‘anti-Petrarchism’は、まず「愛の精神化」と「愛する女性を肉体性から遠く隔絶させて称えること」に対して「辛辣な揶揄」と「厳しい往々にして猥雑な現実性」を対比させることから始められた。‘golden-haired’で‘dark-eyed’の‘Laura’への称賛として書き積み重ねられた「追従のソネット」(‘adulatory sonnets’)から、「美しくなく、善良でなく、貞節でない(not beautiful, not good, not fair)」、ペトラルカとペトラルキスト達がかくあると宣言し続けて来たものには一切無縁の、女たちを歌うソネットが、怒涛のように書かれるようになった。アンチ・ペトラルキスト達は最初はペトラルキストの第一義のattributeである「金色の髪」を‘dark-haired’の女性像に変えて歌うことで満足していた。しかし、TassoやMichaelangeloのような詩人たちは、内なる美を求めることを説く「ネオ・プラトニズム(Platonic doctrine)」に呼応して、「必ずしも美しいわけではない女性を愛する」と言い出した<sup>(99)</sup>

それから徐々に、十六世紀のイタリアのアンチ・ペトラルキスト達は、女というものが‘mind’と‘body’において‘unlovely’になるものであることを示し始めた。同時に‘unlovely terms’を女たちの描写に採用し始めた。しかも個々のソネットの‘the beloved’への用語は、時々刻々、辛辣と愚弄の度を増幅して詩われていくことになる。例えば、Pearsonの実証によると、Berniはペトラルカ式賛美の三大termsへのアンチ・テーゼとして‘silver hair, snowy brows, and white lips’を捧げ、Bemboでさえも‘monster’という

用語を用いたし、B.Stampaは‘a pitiless siren’を、Mezzabarbaは‘a godless murderess’、Sannazaroは‘Medusa and a Basilisk’、Tormintanoは‘a heartless snake’と。自分の恋人の外観の描写として‘foaming at the mouth’などと容赦なく歌い出すものもあり、Molinoは更に過酷に‘an abyss of sin and vice’と。Constanzoは彼の‘mistress’を‘her charms only to injure her lover’とか‘her evil heart’などとの表現で責める。以上のようなアンチ・ペトラルキストの饒舌の仕上げとして、Doniは自身の‘lady’であるhis Creziaを‘the ugliest in the world’<sup>(20)</sup>と歌ったことで、ペトラルカの不滅のミューズへと変身した「ラウラ」は元の川辺の一本の月桂樹に引き戻されてしまったということになった。

また哀歌のソネットのテエマとして‘impossible qualities’の女たちが表出し、その死が詠われた。例えば、「パン屋のレナ」の哀歌のソネット等というもの。更に昂じて「猫」や「麝香猫」の死のカンツォーネ、「物真似鳥」の死のカンツォーネ等々、「馬」「犬」「猿」「鶏」「カササギ」「コウロギ」「その他下等な動物たち」へ捧げられた、このような質のこのようなものの多くが、ラウラの死を悼んで詠いあげるペトラルカのversesの、それらの表現と感情の大抵に相対させて、歌い返された。ペトラルカへのparodyもparodistも、手を替え品を替え、止まるところを知らない<sup>(21)</sup>

ペトラルカ的女性の理想化に対するこのような抗議の次の段階として、崇拜そのものを完全に否定し、Michaelangelo、Sannazaro、Molino、Tansillo等の詩人たちは、Tassoは更に技巧的に、女性を‘infidelity’として糾弾をはじめた。続いて、彼女たちの‘inconstancy’をアーギュメントにして歌った。このような詩い方はペトラルキズムへの抵抗精神に駆られてだけでなく、既にアナクレオン風の詩とオヴィディウスの影響を受けていたからでもあった<sup>(22)</sup>この指唆に続けてPearsonは、シェイクスピアのDark Ladyへのソネットは、ペトラルキスト達の過剰な‘adulation’への抵抗の営為であるものの、決して新奇の創造ではなかったことをここに明記している。事実フランスの詩人たちはイタリアの‘anti-Petrarchists’の後を、何も新しくすることも無く、ひたすら追従していた。しかし、他方で彼は、シェイクスピアにおけるこのコンヴェンションの扱いは、数多の人がDark Lady

へのソネット群は暗にであれ実人生の出来事を投影していると信じるほど、余りにもrealisticな出来映えであることも容認する。シェイクスピアにおいて明らかに眼を惹くこのテエマは、個人的経験が含まれていることは確かであるとしても、‘Dark Lady sonnets’は‘sensual love’に対する‘protest’を伝えていること、そしてそれは‘friendship’を称揚するイタリアのアンチ・ペトラルカ風流行を利用したのであるということ、このことをわきまえておくことの重要性が、それらが漏洩している事実の可能性を推理するよりも、はるかに先行すべきであることが、Pearsonの力説するところである<sup>(23)</sup>

エリザベス朝とシェイクスピアに影響を及ぼし、時代の主題であった‘love’と‘lust’、‘spiritual love’と‘physical love’、‘friendship’と‘sensual love’の議論は、以上のようなイタリアにおける‘Petrarchism’と‘anti-Petrarchism’の発生と展開を、概論の趨勢においても各論として用いられるtermsの次元においても、それらの随時のコンヴェンションの英国版であることが概望できたと思う。再度の確認事項として、シェイクスピアにおいて、‘love-plays’と‘narrative poems’の主題であり全作品に通底する、この「愛の二元論」の提示と‘love’と‘friendship’の優位性への帰着は、彼のThe Sonnetsにおいては、その形式も展開も表現も、全ての枠組みと内部構造の構築術は本家伝来のマニュアルを復唱して鮮明に作品化されているという点である。加えて「愛の帰結法」にもう一言念を押すなら、‘perfect lover’は自分の‘lady’を自分の‘friend’に「放棄」(renounce) することが出来るべしこととは、イタリア式‘the code of honor’の条項でもあったという認識である。

### 3. シェイクスピアの変節の真実

Pearsonの壮大な実証的研究によって、概論においても各論においても、シェイクスピアの愛のphilosophyはエリザベス朝のコンヴェンションの時々刻々の誠実な反映であり、時代のコンヴェンションの造形はチョーサーの伝統と以上のようなイタリアの影響であったことをここに辿り到了とき、まさにシェイクスピアは時代が共有していたコンヴェンションを極力踏襲し、「時代を映す鏡」として自己の作品に再現させ続けたという事が十全に説明される。

しかしながら、Pearson自身、シェイクスピアに受け継がれた個々のコンヴェンションの具体的影響関係を論じた後に必ず念を押すかたちで、シェイクスピアの同時代性とそれを凌ぐ普遍性ということを附記していた。つまり、すっぽりとシェイクスピアに胎蔵されたそれらのコンヴェンションが再び彼の作品として形而下され産出された時、それらの作品の現代にも享受され得る普遍性にこそ「シェイクスピア的独自性」があると概括して、その「辛うじての独自性」を指摘し解釈を下していく。

たとえば、最も今では不自然におもえる「恋人の友への放棄」というコンヴェンションの踏襲について、ソネット42番に見られるように、シェイクスピアは、自分自身と二人のそれぞれの恋人にそれぞれの愛が不実にならないよう「重層する二つの愛の相似形」という愛すべき愚かな奇想を饒舌に駆使し、詰まる所にエリザベス朝の定石である「恋人の友への放棄」をなし遂げる。イタリア式‘the code of honor’のコンヴェンションに準じながら、イタリアでは、Boccaccioをはじめ小説や物語の中などで‘trick’で為されこそすれ、決してありえなかった「抒情性」において事を成させようとする<sup>(24)</sup>、シェイクスピアの苦心を聞き分ける。潔い分別ある英姿のコンヴェンションを採りつつ傍らから愛憎、嫉妬、執着、自己憐憫など、理性の及ばない「人間の真実」を漏れ聞き取らせていく。

殊、『ソネット集』に焦点を当てるなら、‘Fair Youth sonnets’において、まず‘Beauteous Youth’に捧げる「賛美」と‘love’の両面で‘Petrachism’の作法、用語、シークエンスのコンヴェンションを見事に再生することからはじめ、次第にそれぞれを‘anti-Petrachism’の懐疑と‘reason’が感得する‘mutability’と‘mortality’の普遍の真理に対峙させ、‘love’と‘reason’の認識の相克の中で愛の「復活」を画策し、「愛は不滅だ’(‘Love’s not Time’s fool’)の宣言に到達する。この苦肉のコンヴェンションからの逸脱に、Pearsonはシェイクスピアの普遍性と独自性を識別し、筆者の「シェイクスピア的変節」と命名するところである。自己の心の高邁な‘love’も、‘beauty’も、時を刻みつけるようにほころびていくのを見つめ尽くしつつ、自らの内で愛の再生を決意していく真実が聞き取れる。‘I am that I am’——私は(愛の)神であり、(愛の)神の敬虔な信者であり、神の愛への‘faith’

をひたすら信者の証しとして、愛の‘miracle’を起こすことをもって外には無い、ともう一つの「愛の一神教」への告白をしてみせる。

‘Dark Lady’シークエンスでは、まず‘Dark Lady’を‘sensual love’のシンボルとするsonnets 127-154において用いられるコンヴェンションは、先に考察した‘Petrachism’に対する‘anti-Petrachism’の発生と発展の過程に採用された変節へのステーションをたどっていく。「黒い外観」へ‘Petrachism’の‘conventional terms’の個々に‘anti-Petrachism’の‘conventional terms’を相対させて逆説的賛美を捧げて‘sensual love’に向かい、‘dark’ ‘not fair’ ‘ugly’ ‘a monster’と外から中へ向かわせる。そして「内面の黒」への認識として、「腐った白百合」「黒い行為」「真っ黒い芯’ ‘bad angel’ ‘evil spirit’ と定石通りにコンヴェンションを押し進めてその本源に到り、「地獄に導く天国」との万人周知の‘physical love’への幻滅で締めるほかはない。以降は、キリスト教用語とその文脈での‘conventional terms’によって、‘Dark Lady’と‘lust’へのアンビヴァレンスの反問と葛藤を虚しくも大真面目に展開していく。‘Dark Lady’シークエンスと‘Fair Youth’シークエンスも合わせ、シェイクスピアの‘physical love’と‘rational love’の愛の二元論の結末としては、‘And so he renounces his loved Dark Lady to his friend.’<sup>(25)</sup>とのPearsonの説明通り、エリザベス朝の愛の‘the code of honor’のコンヴェンションで片を付けた。そして‘physical love’を歌い続けたことへのパリノードを重ね、清く生きることを誓わせて歌い納める。

しかしこの後更に、153番と154番の二つのソネットを重ねるが、これらのソネットもまたある種時代に最新の‘conventional terms’によって歌い出されていた、つまり、マリアヌスの『ギリシア語警句集』の「温泉起源説」のイメージと用語を駆使しながら、‘lust’への人間の諦念を意味する‘anti-Petrachist’の‘parody’的性格を持つものである。しかし、‘Dark Lady’シークエンスの正しく最後の最後に加えられたこの逆立ちした‘anti-Petrachism’的揶揄の背後からこそ、シェイクスピアの『ソネット集』における、Pearsonの言葉にある「コンヴェンションの踏襲とそれを凌ぐ普遍性」が読み取られなければならない。‘Dark Lady’と‘physical love’の不気味な実体を見つめて、シェイクスピア自身の心底深くに不滅の生を



もって生きつづけている異端の愛の神々が存在することを識らなければならないし、故に、その紛れもない異教の愛の神に殉じることをもって在らねばならないことを表明して終るしかない。

『ソネット集』から再び問い直されて愛として確かに存在している'spiritual love'と'physical love'の、この愛の二元論を如何に理解すればよいのか——『ソネット集』の「詩人」はこのディレンマをこそ普遍として、自身の時代にも今にも、納得させる。S.C. Boormanは、この'reason'と'love'の二律背反の葛藤はエリザベス朝人の真剣な問題であったと指摘し、理由として、それは当時、男たちは女たちを妻という役割で受諾くしていたし、元よりエリザベス朝人の結婚は金銭的理由や現実的な理由のためであったという時代の社会的背景が、愛についてのこのような矛盾を意識させ議論させたことに繋がっていると説明する<sup>(26)</sup>更にその認識は、'man'と'woman'、'soul'と'body'、'reason'と'love'についてエリザベス朝人が抱いていた'human conflicts'とそのメカニズムを理解することに拠ってより理解されてくる。Boormanは*Human Conflict in Shakespeare*で以下のように論説している。

当時男と女の間の愛とは、男は'the rational'と'the irrational'に二分にされ、女は自らは「恐怖される誘惑者」と「崇拜されるパートナー」であると感じる状況であると考えていたし、また、エリザベス朝の男は、とりわけ、自分自身'soul'は'body'に同レベルで繋がれているとみなし、その'body'に宿る'lust'を通して女は男を破滅させることができるし、同時に繊細な感情を持つ生き物として男を高め、単なる'lust'を越しプラトニズムの'a spiritual unity'へ至らせ得るものであると、考えていた。<sup>(27)</sup>

『ソネット集』において、シェイクスピアは、時代の孕んだ疑念を抱え込み、愛のアンビヴァレンスのとぐろの中で人間の本心を晒しつつ、それでも'his beloved Dark Lady'を'Fair Youth'に「放棄」することで、'truth'と'beauty'の掟を破ることなく背反する愛を'hurmonize'させてみるが、かりそめの解決でしかないことを知っている。深い自己欺瞞が二つのシークエンスの結句有情となって余韻している。

この愛の二元性を見極めて真の解決へ模索することが、シェイクスピアの二つの'narrative poems'であり'love-plays'であり、そして遂にシェイクスピアは、*Romeo and Juliet*において生命をも犠牲にして愛に殉じさせることによって'physical love'を'natural love'へと救済させ、*The Merchant of Venice*に到り、更にPortiaという女性において'womanly graces'と'masculine strength of mind'を統一させることで'love'と'friendship'を救い二者を調和へと到らせ得た<sup>(28)</sup>とL.E. Pearsonは、シェイクスピア的愛の解決を説いた。

しかし、「それ以上に、我々は思い出さなければならない、愛も情欲と同じ理性からは遠いものとみなされていたことを——愛も情欲も両者は特質として非理性のものとみなされていた<sup>(29)</sup>」とは、Boormanによるエリザベス朝人の認識の分析であるが、正しくここに在る、途方もなく大きい底なしの深い矛盾に向き合う「峻厳な懷疑」と「必死の諦観」がシェイクスピアの居場所であり、自分自身の本心への変節の覚悟こそ、さまざまな変節のコンヴェンションを踏襲し尽くしたシェイクスピアの、「最期の変節」といえはしないだろうか。

#### [テキスト]

- 1) Rollins, H.E., ed. *The Sonnets*. (A New Variorum Edition of Shakespeare) (Philadelphia London, J. B. Lippincott company, 1944)
- 2) Pooler, C.K., ed. *The Sonnets*. (Arden Edition) 2nd rev. ed. (London, 1931)
- 3) Booth, Steven, ed. *Shakespeare's Sonnets*. (New Haven: Yale U.P. 1977)
- 4) Wilson, Dover, ed. *The Sonnets*. (London: Cambridge U.P. 1981)
- 5) Ingram, W.G., Redpath, Theodore, ed. *Shakespeare's Sonnets*. (U. of London P., 1964)
- 6) Rowse, A.W., ed. *Shakespeare's Sonnets*. (London: Macmillan, 1964)
- 7) 『シェイクスピアのソネット』 田村一郎・松坂公延・六反田収・田淵實貴男訳, (文理大学事業部, 1975)

#### [参考文献]

- 1) Anspacher, Louis. *Shakespeare As Poet and Lover*. (New York: Haskell House Publishers Lt

- o.,1973)
- 2) Boorman, S.C. *Human Conflict in Shakespeare*. (London and New York: Routledge and Kegan Paul, 1987)
  - 3) Camden, Carroll. *The Elizabethan Woman*. (London: Clarendon Press, 1952)
  - 4) Hall, Michael. *The Structure of Love*. (U.P. of Virginia: Charlottesville, 1989)
  - 5) Horwich, Richard. *Shakespeare's Dilemmas*. (New York: Peter Lang, 1988)
  - 6) Meader, William G. *Courtship in Shakespeare*. (New York: King's Crown Press, 1954)
  - 7) Pearson, Lu Emily. *Elizabethan Love Conventions*. (London: George Allen & Unwin Ltd, 1966)
  - 8) Vyvyan, John. *Shakespeare and the Rose of Love*. (London: Chatto & Windus, 1960)
  - 9) \_\_\_\_\_. *The Shakespeare's Ethic*. (London: Chatto & Windus, 1968)

#### ＜訳書関係＞

- 1) Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy*. ロバート・バートン『恋愛解剖学』斎藤美洲訳 (桃源社、1964)
- 2) Castiglione, Baldassare. *Il libro del Cortegiano*. カステリオーネ『宮廷人』清水、岩倉、天野訳 (東会大学出版会、1944)
- 3) Chaucer, Geoffrey. *The Raumaunt of the Rose*. チョーサー『薔薇物語』境田進訳 (小川書店、1997)
- 4) Dusi, Juliet. *Shakespeare and the Nature of Women*. ジュリエット・デュシンベリ『シェイクスピアの女性像』森祐希子 (紀伊国屋書店、1997)
- 5) Guillaume de Lorris et Jean de Meun. *Le Roman de la Rose*. ギョーム・ド・ロリス ジャン・ド・マン『薔薇物語』篠田勝英訳 (平凡社、1997)
- 6) Huizinga, J. *Herbst des Mittelalters*. ホイジンガ『中世の秋』堀越孝一郎訳 (中央公論社、1988)
- 7) Kennedy, E.J.P. *Ovidi Nasonis Ars Amatoria; Remedia Amoris*. (Oxford U.P.)  
オウィディウス『恋の手ほどき 惚れた病の治療法』、藤井昇訳 (わらび書房、1984)
- 8) Lewis, C.S. *The Allegory of Love*. (London: Oxford U.P., 1936) ルーイス『愛のアレゴリー』玉泉八州男訳 (筑摩書房、1984)

- 9) Parry, J. Jay. *Andreas Capellanus, The Art of Courtly Love*. カペルラヌス『宮廷風恋愛の技術』野島秀勝訳 (法政大学出版会、1990)
- 10) Petrarch, Francesco. *Canzoniere*. ペトラルカ『カンツォニエーレ』池田廉訳 (名古屋大学出版会、1992)
- 11) Rougemont, Denis De. *L'Amour et L'Occident*. ルージュモン『愛について 上下』鈴木、川村訳 (平凡社、1993)
- 12) Taylor, Gordon R. *Sex in History*. G.R. テイラー『歴史におけるエロス』岸田秀訳 (河出書房新社、1996)
- 13) Trojel, E., ed. *Andreas Capellani Regii Francorum, De Amore, Libri Tres*. カペルラヌス『アンドレアス・カペルラヌス 宮廷風恋愛について』瀬谷幸男訳 (南雲堂、1993)
- 14) Valency, Maurice. *In Praise of Love*. ヴァレンシー『恋愛礼賛』踏掛、川端訳 (法政大学出版局、1995)

#### ＜邦文関係＞

- 1) 伊藤勝彦『愛の思想史』(紀伊国屋書店、昭和五十七年)
- 2) 東田千秋編『Literature and Appreciation 作品と読者』(前田書店、昭和五十二年)
- 3) 斎藤美洲『英国近代精神の胎動』(研究社、昭和四十一年)
- 4) 吉田新吾『チョーサー研究』(あぼろん社、1966年)

#### 【脚注】

- (1) アンドレーアス・カペルラヌス、瀬谷幸男訳『宮廷風恋愛について』南雲堂、1999年、P.235 訳者あとがき参照。
- (2) Vyvyan, John. *Shakespeare and the Rose of Love*. (London: Chatto & Windus, 1960) P.39.
- (3) *Ibid.*, P.40.
- (4) チョーサー、境田進訳『薔薇物語』小川書店、1997年、P.221 あとがき参照。
- (5) *Ibid.*, P.222.
- (6) *Ibid.*, P.221.
- (7) カペルラヌス, *op.cit.*, PP.221-238, 訳者あとがき参照。
- (8) 吉田新吾『チョーサー研究』あぼろん社、1966年、

PP.20-21.

(9)*Ibid.*,P.22参照.

(10)今西雅章編注*Astrophel and Stella*.あぼろん社,  
1983年,P.60. 3章作品論3.

(11)吉田新吾, *op.cit.*,PP.22-23.

(12)*Ibid.*,P.23.

(13)Peason,L.E. *Elizabethan Love Conventions* (Lon-  
don:George Allen & Unwin Ltd,1966) P.300概要参  
照.

(14)*Ibid.*

(15)*Ibid.*,P.301参照.

(16)*Ibid.*,PP.301-302 概要参照.

(17)*Ibid.*,PP.302-303 概要参照.

(18)*Ibid.*,P.303, 参照.

(19)*Ibid.*,PP.273-274 概要参照.

(20)*Ibid.*,PP.274-275 概要参照.

(21)*Ibid.*,P.275 概要参照.

(22)*Ibid.*,P.276 概要参照.

(23)*Ibid.*,P.277 概要参照.

(24)*Ibid.*,P.282概要参照.

(25)*Ibid.*,P.281.

(26)Boorman,S.C. *Human Conflict in Shakespeare*.  
(London and New York:Routledge and Kegan  
Paul,1987) P.15参照.

(27)*Ibid.*,P.15 筆者拙訳.

(28)Pearson,*op.cit.*,P.204参照.

(29)Boorman,*op.cit.*,P.13筆者拙訳.